

原田版「こんてむつすむん地」の版式について

白井 純

1. 版式についての先行研究

原田版「こんてむつすむん地」(1610年刊、京都原田アントニオ印刷所)はこれまでキリシタン版の一つに数えられながら、特殊なキリシタン版として位置づけられてきた。他のキリシタン版が九州で印刷されたのに対して京都で印刷されたこと、国字本活字としては類例のない独自の木活字で印刷されたこと、印刷機も西洋式のプレス印刷機ではないことなど、印刷物としてみた場合にその特殊性が強く現れている。

内容はトマス・ア・ケンピス Thomas a Kempis 著の *De Imitatione Christi et Contemptu Omnium Vanitatum Mundi* (キリストに倣うこと、すべての世俗的な虚栄を厭うこと)、通称「イミタチオ・クリスチ(キリストにならいて)」の翻訳であり、同テキストを翻訳したキリシタン版としては1596年刊のローマ字本「コンテムツス・ムンヂ」があるほか、1602年頃に刊行された一本(未発見国字本)もあったようであり、宗教書として重要なテキストであることは間違いなく、キリシタン版の系譜に連なるものとしてまったく違和感はない。

印刷物としての特殊性をもつ「こんてむつすむん地」の版式については、天理図書館館長だった富永(1956)がはじめキリシタン版の覆刻整版(かぶせ彫り木版)であると主張したが、富永(1958)では漢字と仮名、連綿を含むいくつかの文字印影の現れ方(同一の形状をもつ文字影印が複数丁にわたって再現し、しかも同一丁内には存在しない)を根拠に否定し、長崎版を模した木活字版であるという説に転じた。この立場は池内(1976)が漢字「御」の文字印影について20種あまりを識別する綿密な調査を行ったことでも追認されたが、ルビの使用、印刷時期からみて後期国字本のうちでも後藤版に類似しており、1602年頃に刊行された国字本を模したものである可能性を含めて現在では定説となっている。

一方、天理図書館司書研究員だった新井(1964, 1965, 1973)は富永が木活字版に転じた後も覆刻整版であるという説を維持しており、池内(1976)は天理図書館関係者としてこれらの先行研究を整理することを調査の出発点としている。

2. 本稿の論点

本稿は、新たに作成した全活字画像データベースをもとに、原田版「こんてむつすむん地」の活字形状からわかる特徴をみたく、*「こんてむつすむん地」*が活字運用についてもキリシタン版後期活字本に近い性格を持つものなのかを検討しようとするものである。

富永(1958)は「こんてむつすむん地」のいくつかの漢字・仮名・連綿活字を選び、そ

れをキリシタン版後期活字本と比較し、これらが酷似していることから「本版にあつては、一文字(金属活字)を基にしてこれを被せ刻りして出来た様々な種類の活字文字をもつて、活字版を組立てた」と推定している。池内(1976)はキリシタン版「こんてむつすむんぢ」の存在を前提に「恐らくかぶせ刻りの手法で一つ一つの木活字を作り、組版に際してもつとめて長崎版に忠実に、つまり行数や字数はもとより一字一字の書体までも長崎版のそれに合わせて組むようにした」とするが、この仮説が正しいとすると、活字の種類や形状はもとよりその運用についてもキリシタン版後期国字本との類似性が認められる筈である。

「キリシタン版」の定義は一般的に「日本イエズス会によって出版された本」ということになるが、西洋式のプレス印刷機と金属活字を用いた印刷技法は単に技術上の問題に留まるものではなく、活字の設計や運用をとおしてイエズス会の日本語表現に大きな影響を与えたことが明らかにされている(豊島(2002, 2009)、白井(2013)など)。換言するならば、イエズス会の日本語は、それが金属活字で印刷されることと不可分の関係を持つということであり、その意味で、印刷物としてみた「こんてむつすむん地」の性格を明らかにすることは、単に印刷技術史上の位置づけのみならず、これを言語資料として利用する際にも必要な前提なのである。

3. 活字形状の特徴(全体的な傾向)

本稿で原田版「こんてむつすむん地」の版式を調査するために構築した活字画像データベースからは、「こんてむつすむん地」が活字在庫をあまり持たないこと、つまり、一つの字種内では同一の形状をもつ活字が同一丁内に全く現れず、少ない活字を複数丁に繰り返し用いて印刷の効率化を図っていることが第一に見て取れる。よって「こんてむつすむん地」を木活字本とした富永(1958)の理解は基本的に正しい。

漢字活字の形状については既に指摘されるように大半がキリシタン版後期国字本活字に類似する。1字種に複数の字形をもつ(例えば、「事」は3種類の字形)ではそのうち1つがキリシタン版とは全く異なるなどごく一部に例外は認められるが、すべて途中で現れる追加作成の活字とみられることから、全体的にはキリシタン版に酷似すると言っても過言ではなく、先に紹介した「一文字(金属活字)を基にしてのこれを被せ刻り」したという見解があっても無理はない。以下の図1-AとBはキリシタン版に似ているが、Cは明らかに異なる。AとBがそれぞれ複数の字形を持つのに対してCは1つの字形しかなく、延べ34丁にわたって一つの活字が使いまわされている。



図1-A 1才2-6



図1-B 1ウ13-12



図1-C 1才1-9

漢字活字の総数は、今回の調査では70字種、1字種あたりの平均保有個数は5.62(中央値は2)となる。この個数は、同一漢字が同一丁内に何例集中したかを以って、その漢字の最低保有個数を保有個数に等しいと仮定して算出した。「事」の35個、「第」の31個、「御」の25個(ただし原本を調査した池内(1976)によれば「御」25個のうち4個は手書きだという)ほか、漢数字にも10個以上の頻出漢字が多い一方で、24字種については

最大でも1個しかなく、字種毎の在庫数には相当の偏りがある。漢字の出現はそもそも文脈に依存するうえ、後述のようにルビを使うことを条件に漢字を使用した字種がいくつかあることも原因である。

仮名活字や連綿活字の形状についてもキリシタン版に類似する。

但し、文字の種類を問わず、冒頭の数丁（とくに顕著なのは1丁と2丁）では、必要となる活字の個数を上回って活字が作成されることが多く、1丁で使った活字が2丁で使われないことが多い（表1,2参照）。

丁	A	B	C	D	E	F	G	H
1	善	善	善	善	善			
2						善	善	善
3				善	善			善
4						善	善	
5	善							
6		善						善
7	善				善	善		
8		善	善			善	善	善
9	善			善	善			

1								
0								

表 1: 活字「善」の種類と共通性

T	A	B	C	D	E	F	单独活字
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							

8							1
9							2
10							1

表 2: 連綿活字「ゆへ」の種類と共通性

1丁と2丁ですべての文字の形状が必ず異なるのなら、それは活字版というより整版であろう。一方、後続の丁で同一の形状をもつ文字が繰り返し現れるとすればそれは活字版であり、これらを矛盾なく説明するためには1丁と2丁が整版であり、その後が活字版であるという「乱版」を想定するべきである。

但し、1丁と2丁で同じ活字を用いたと思われる例も少ないとは言えない(図2参照)。



図 2-A 1ウ 6-1



図 2-B 1ウ 14-4

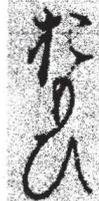


図 2-A' 2ウ 11-13



図 2-B' 2ウ 11-3



図 2-C 1ウ 2-20



図 2-C' 2オ 14-1

「する」は初めから傷のある連綿活字だがこの傷が共通しており、同一の活字だと思われる。よって、1丁と2丁が整版であると断言できるほどの確証は得られなかった。

4. 活字の形状(個別の例の検討)

「こんてむつすむん地」の冒頭付近には活字同士が接触した箇所が多い(図3参照)。



図 3-A 1才7-19

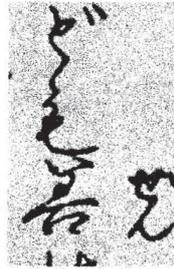


図 3-B 1才11-24



図 3-C 1ウ1-5



図 3-E 1ウ3-10



図 3-F 1ウ9-23



図 3-G 2ウ1-14



図 3-H 3才14-3



図 3-I 3ウ9-15



図 3-J 1才13-11

キリシタン版では、豊島（2001）が指摘したように連綿活字が自立語の開始位置を跨ぐことがなく、この傾向は同時代の日本の文献にも程度の差はあるが一般的に認められる。したがって仮名から漢字につながるような、分節を否定する位置に好んで連続活字を用意するとは思えず、だとすれば一丁まるごと整版という可能性が浮上するのだが、さきほど検討した反例を考慮するなら、活字のボディーすれすれまで文字の字画が配置された活字を組み合わせたと考えておきたい。

ところで本稿では、視覚的に文字同士が連続している活字を連綿活字とし、離れていれば単独活字として扱ったため、不自然であっても接触の度合いによって判断せざるを得ない例があった。例えば連綿活字「かく」として認定した例（図 3-J）では、接触しているものの字画そのものが連続性を持つものではないうえに、これを連綿活字とすると使われた

のはこの箇所だけで他は単独活字を組み合わせたという、理解しにくい説明に陥る。おそらく、「かく」は単独活字の組合せなのだろう。

ただし、図 3-F「たかぶる事」の例は「ぶる+事」かもしれないが、連綿活字「ぶる」が他にみられず単独活字で 8 箇所を組んでおり、少なくともこの時点では「ぶる事」という一つの連続活字だった可能性は否定できない。

また、図 4-A「の+た」は字画の接触こそ無いが連続性をもち、単独活字「の」の末端が右に曲がるのは 1 丁オ 4-5 や 3 丁オ 10-14 など 18 例の「のた(まふ)」の連続に限られるので、これは連続活字である蓋然性がきわめて高い。



図 4-A 1オ4-5



図 4-B 17オ9-20



図 4-C 61オ15-9

それと同様に文字の字画が上下に入り組んだ例では、図 4-B「事」がこの形状をもつのは全体をみてもこれだけであること、「ふ」と「事」が入り組んでいることからして連続活字であると思われる。図 4-C「久しく」も入り組みがあるので連続活字なのだろう。あるいは手書きなのかもしれないが、漢字「久」はこれ以外にみられないため影印からは判断できない。

「ごと」は「ごとく」から切りだされた活字であると考えられる(図 5、表 3 参照)。



図 5-ごとく A



図 5-ごとく B



図 5-ごとく C



図 5-ごと 16オ8-24

「ごとく A」は 14 丁まで使われ、16 丁で「ごと」に「いハひの日ごとに」の「ごと」に転用されて消滅したと思われる。同様の例に、「げん」の濁点を削って「けん」(11 オ 4-13 や 14 オ 13-18 など 12 例)とした例や、「ざる」から切りだされたと思しき「ざ」(27 ウ 9-2 や 32 オ 7-8 など 4 例)の例があるが、連綿活字「ごと」の有用性に比べて「ざ」はそもそも単独活字があるため必然性に乏しく、転用の理由はよくわからない。

既成品の活字を分割して個別の活字の代用としたのは、キリシタン版前期国字活字本で「男」の活字を上下に切断して「力」に流用した例が知られている(山口(1991)参照)。豊島(2010)が指摘したようにキリシタン版がこの時点では国字の金属活字を国内生産で

きない（活字はヨーロッパ製である）とすれば、やむなく転用したと考えてよいが、「こんてむつすむん地」にみられる活字の転用は、木活字であれば追加作成は容易であるから、明らかに活字作成の手間を惜しんだためとみられる。

	2	4	5	8	10	11	12	13	14	15	16	17	19	21	22	23
ごとく A	1	1	1	1				1	1							
ごとく B					1	1	1		1	1		1	1	1		1
ごとく C																
ごと											1		1	1	1	
	24	27	29	30	32	35	36	39	42	43	44	45	46	...		計
ごとく A														...		7
ごとく B	1	1		1			1	1	1		1			...		22
ごとく C			1	1	1	1		1		1		1		...		16
ごと			1										1	...		14

表 3：連綿活字「ごとく」と「ごと」

5. 活字運用の特徴

つづいて、活字運用の特徴について考えてみたい。

はじめに活字の種類についてみておく。比較のために、キリシタン版「ぎやどぺかどる」（1599 年刊）と後藤版「どちりなきりしたん」（1600 年刊）も挙げておく（表 4,5 参照）。原田版「こんてむつすむん地」がキリシタン版を模したものであれば、活字運用の特徴が後藤版「どちりなきりしたん」に類似すると予想される（表内の「2 連仮名」は仮名の二字連綿活字、「2 連含漢」は漢字と仮名の二字連綿活字である）。

	記号類	単独仮名	単独漢字	2 連仮名	2 連含漢	3 連仮名	3 連含漢	合計
ぎや	2181	66365	67463	17744	4581	1019	35	159388
どちりな	631	26507	4190	7505	723	234	20	39810
こんて	2235	51427	6450	8992	550	409	0	70063

表 4：活字の種類と数（実数）

	記号類	単独仮名	単独漢字	2 連仮名	2 連含漢	3 連仮名	3 連含漢	合計
ぎや	1.4	41.6	42.3	11.1	2.9	0.64	0.02	100.0
どちりな	1.6	66.6	10.5	18.9	1.8	0.59	0.05	100.0
こんて	3.2	73.4	9.2	12.8	0.8	0.58	0	100.0

表 5：活字の種類と数（比率）

単独漢字活字と単独仮名活字の使用比率の違いには、それぞれの文献の性格が強く現れ

ている。各資料の漢字と仮名の使用傾向が大きく異なり、単独活字については「ぎやどぺかどる」が漢字 42.3%：仮名 41.6%であるのに対して、「どちりなきりしたん」が漢字 10.5%：仮名 66.6%、「こんてむつすむん地」が漢字 9.2%：仮名 73.4%となり仮名活字が多い。このことは、版面から受ける印象からも明らかだろう。

しかし、「どちりなきりしたん」が2字連続の仮名活字を18.9%まで用いるのに対して「こんてむつすむん地」は12.8%に過ぎず、結果として単独仮名活字の比率が高くなっている。富永（1958）が「こんてむつすむん地」の印象として「金属版よりも版面全体に白地が目立ち、白々している。白々しているのは一面、劃の少ない平仮名を主体としているということに原因があるでもあろうが」としたのは、具体的には単独仮名活字が多いことによる。

このことは活字が対応する文字種の数に顕著に認められる。以下に示す数値は文字種を基準としているため、一つの字種（あるいは一つの文字列）に対して複数の活字種をもつ場合（異形活字や漢字の異体字を含む）でも数のうえでは1と数えている（表6参照）。

	記号類	単独仮名	単独漢字	2連仮名	2連含漢	3連仮名	3連含漢	合計
ぎや	15	77	1548	222	22	15	2	1901
どちりな	11	75	216	235	17	11	2	567
こんて	12	76	71	169	6	15	0	349

表6：活字が対応する文字種の数

「こんてむつすむん地」は「どちりなきりしたん」より大規模な文献（文字数にして2倍弱）であるにもかかわらず、漢字の種類に乏しく連綿活字も少ない。このことから、キリシタン版後期国字活字本の活字セットを縮小し劣化させたものという印象を受けるが、「どちりなきりしたん」の漢字活字は後藤版の特徴の一つに数えられるルビによって読みを担保されて用いられる特徴があり、仮にルビが無いとなると使用を見合わせる漢字が多くなると予想される。ルビは対象となる漢字の左右に空きがある場合に可能だが、問答体で改行の多い「どちりな」には適した方法であった。その点で、「こんてむつすむん地」も冒頭こそルビを持つものの不完全で、9丁を最後にルビは一切みられなくなるが、一段落が長くルビを配置する余地が少ないという実情もあるので、「どちりなきりしたん」と「こんてむつすむん地」の漢字活字と、それを置き換える仮名活字を含む仮名活字全体の比率を比較する際には留意が必要である。

しかしながら、仮名連綿活字の種類のお少なさと使用頻度の低さは明らかであるから、これについて詳しくみておきたい。

6. 連綿活字の使用比率

連綿活字の使用比率は、白井（2008）において「連綿率」という算出方法を用いた。この方法は、その印刷物が印刷された時点で存在したであろう連綿活字が組版可能な文字列のうち、どれだけの割合で連綿活字を実際に用いたかを算出する方法である。この方法は

活字の在庫数を無限と仮定するため、上限数のはっきりしている連綿活字（例えば連綿活字「あにま」はキリシタン版、原田版ともに2種類各1個しかない）では実態にそぐわない面が出てくるが、全体の傾向を知るうえでの問題は少ないだろう（表7参照）。

	ぎやどぺかどる	どちりなきりしたん	こんてむつすむんぢ
2字連綿活字	90.4%	84.0%	62.0%
3字連綿活字	81.1%	71.1%	52.7%

表7：連綿活字の使用比率

原田版「こんてむつすむん地」は連綿活字の使用率が極端に低い。在庫している連綿活字の種類が少ないことに加え、存在する連綿活字についても使用率が低いのは、一つの連綿活字毎に用意される在庫が少ないため不足を生じたか、在庫はしていても使用に積極的でないかのどちらかである。前者であれば同一母型からの量産ができない木活字の特徴が現れたもので、後者であれば組版上の方針の違いということになる。

まず、同一丁内の最大個数をみておこう（表8参照）。

最大個数	1	2	3	4~5	6~10	10~	合計
ぎや	84	47	28	32	28	25	244
どちりな	79	51	23	39	37	23	252
こんて	84	34	22	21	11	3	175

表8：連綿活字の同一丁内最大個数

「こんてむつすむん地」の2字連綿活字175種の同一丁内最大個数の平均は2.38個であるのに対して、「どちりなきりしたん」は4.06個、「ぎやどぺかどる」は3.72個である。一面あたりの行数は各文献とも17行で同じで文字数も大きくは変わらない。「こんてむつすむん地」は連綿活字の種類が少なく、且つ、その使用にも消極的である。

以下に連綿率と在庫数の関係をまとめた。例えば、連綿活字「もん」は全体で33回使われ同一丁内には最大4個（＝在庫4個）があり、且つすべての文字列「もん」を連綿活字で賄うため連綿率は100%となる。また、連綿活字「もの」は全体で73回中33回は連綿活字を使い、在庫1個で連綿率は31.1%となる（表9参照）。

表の右上に近いほど連綿活字の回転襲用率が高いため効率が良く、逆に左下に近いほど効率が悪い。ここから、原則として活字在庫数が多ければ連綿活字で組む箇所も多い、という比例関係が読み取れる。

「連綿率」が100%となる連綿活字は以下のとおり。

もん（4・33、在庫4個で連綿活字33箇所）、きん 3・15、ハヅ 2・17、くん 2・14、せず 2・8、思ひ 1・31、よふ 1・5、すゞ 1・1

	0～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	80～	90～	100%
在庫 1	9	5	12	16	11	7	12	4	1		3
2		1	1		3	4	5	13	3	1	3
3				1	2	5	1	2	8	2	1
4							1	1	4	5	1
5					1	2		1	2	3	
6							1		2	3	
7								2		2	
8										1	
9											
10										1	
11										1	
12										1	
平均	1.00	1.13	1.08	1.12	1.65	2.22	1.75	2.57	3.23	5.80	2.00

表 9：連綿活字の在庫数と使用の関係

「思ひ」は在庫数が 1 個しかない（連綿活字「思ひ」活字印影を確認したがすべて同じ）のにもかかわらず 31 箇所すべてで連綿活字を用いているが、単独の漢字活字「思」を持たず、他がすべて仮名活字で組まれているためである。

以下の連綿率 80% 以上の連綿活字は殆どが 1 つの形態素に対応し、実際には一つの漢字を代替することも多い。これらが可読性 (readability) を高めるための分節 (punctuation) に関わることは明らかで、漢字使用率の低さが連綿活字によって補われたのは間違いない。

連綿率 80% 以上の連綿活字：あら、あり、いふ、から、かり、かる、する、たゞ、だり、たる、なり、なる、ばん、ふる、まゝ、ゆへ、より、らん、給ふ、者也、して、さん、奉る、ざる、るゝ、給へ、しり、ども、しる、すべ、たり、ぶん、むる、まん、がら、もふ、こん、たゝ、ねん、ざす、れり、こそ

一方で連綿率の低いものも多く、絶対数の少ないものはおくとしても散漫な運用を否めない。以下は在庫が 1 個しか確認できない連綿活字のうち、単独活字の箇所が大幅に上回るものである。

かく 1-1-124（在庫 1 個で、連綿活字 1 箇所、単独活字 124 箇所）、らず 1-1-53、かし 1-1-46、ぜん 1-1-45、まじ 1-1-41、まず 1-1-9、ぶる 1-1-8



1才13-11「ふかく」



2ウ14-18「しらず」



60才2-25「むつかしく」



1ウ16-22「もくぜん」



31ウ6-4「いふまじき」



2ウ5-24「のぞまず」



1ウ9-23「たかぶる事」

おのおの、連綿した部分についてだけみれば単独活字で組んだ部分が多いのだが、「しらず」「むつかしく」「もくぜん」「いふまじき」「のぞまず」「ぶる事」と続くのはこの箇所だけという特徴がある。4.で検討した接触のある「ぶる」と「事」が一つの連続活字だとしたら、他も連続活字なのではないだろうか。この仮説は、「こんてむつすむん地」のルビにも連綿活字があり、欧文は1行まるごと一つの活字だという事実とも相性が良い。だとすれば本稿で指摘した連綿率の低さも、字画の接触しない連続活字の存在を認めることでまた違った解釈が求められるだろう。この問題については稿を改めて詳細に調査したい。

2字連綿活字の連綿率は、1丁で74.5%、2丁で71.7%、3丁で69.2%と高い。連綿率は「こんてむつすむん地」全体で使われた2字連綿活字すべてが当初から在庫したと仮定した算出方法なので、冒頭で高い連綿率を達成するという事は、途中で初めて現れる連綿活字が少ないことを意味している。事実、2字連綿活字は1丁で74種、2丁で46種、3丁で18種が現れて全体の80%に達しており、その多くは対応する文字列が初出した位置で使われている（表10参照）。

丁	1	2	3	4	6	8	9	10	11	16	17	18	24	25	26
初出	74	46	18	1	1	2	2	2	4	2	2	2	2	1	1
丁	28	29	30	31	34	35	40	41	42	44	60	76		全	
初出	2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1		175	

表10:「こんてむつすむん地」の2字連綿活字の初出位置

4 丁以後は散発的に新しい連綿活字が現れるのみ（同一の活字種のなかに複数の活字を生じることにはある）なので、よく使われる連綿活字は多くが序盤に現れるとみてよい。活字形状についてみた内容と関連させるならば、印刷を開始した冒頭では活字種の選定と量産（つまり活字セットの設計と育成）が行われたとみるべきである。ただし 44 丁で初出する「かれ」はそれまでに単独仮名活字が 80 例、60 丁で初出する「かし」はそれまでに 30 例が単独仮名活字を用いるなど例外もある。

7. 連綿活字の一致度、および本文との対応

原田版「こんてむつすむん地」の単独漢字活字はすべてキリシタン版後期活字本に使われており、且つ、その形も殆どが類似する。単独仮名活字についてもこれと同様であるが、富永（1958）が「金属活字中の連続文字にして本版の木活字に存せぬものも相当数存する」「木活字は金属活字以上に一或は、以外に一多く種類をもつていた」とするように、連綿活字については「こんてむつすむん地」で欠くもの、反対に「こんてむつすむん地」にしか無いものがある。これだけ独自の連綿活字をもつのは、一時は覆刻整版までも疑った富永とすれば「真の理由はよく判らぬ」のも無理からぬところなのだろうが、その理由を考えてみたい。

キリシタン版後期活字本にみられず、「こんてむつすむん地」にある 2 字連綿活字（漢字＋仮名の連綿を含む）は 33 種あり、全体 175 種の 19%を占めており無視できる数ではない。

をひ(89)、こゝ(68)、なを(66)、した(60)、ハリ(60)、しり(48)、なき(42)、よろ(40)、もの(37)、へり(34)、もと(28)、なふ(25)、たへ(23)、とゞ(23)、なひ(23)、もち(22)、たふ(15)、ごと(14)、くり(12)、もろ(12)、うつ(11)、すゝ(10)、つか(9)、ざす(6)、くち(4)、ぐち(4)、たつ(3)、かれ(2)、ぐり(2)、かく(1)、かし(1)、すゞ(1)、わく(1)、

「こんてむつすむん地」が印刷に先立って、キリシタン版後期国字活字本の活字を一個毎に版下として活字を作成し、それをを用いて印刷したとは考えにくい。だとすれば、これら 33 種に連綿活字が用意された理由は「こんてむつすむん地」の本文との関係からみてゆくべきだろう。

2 字連綿活字 175 種が対応可能な文字列の出現回数は 16634 回で、そのうち 9542 回は実際に連綿活字を使っている。したがって、2 字連綿活字の一種あたり平均 95.1 回の出現である。一方、2 字連綿活字のみられない 2 文字続きの文字列(2-gram)は 4828 種で 63786 回の出現となり、平均 13.2 回となるから、連綿活字は高頻度の文字列に対応して使われたと言ってよい。「こんてむつすむん地」の連綿活字はキリシタン版後期国字活字本と同様に仮名から漢字につながる箇所では分節への配慮によって連綿活字が現れないので純粋に頻度だけでみることはできないが、大まかな傾向はみえてくるだろう。

以下は「こんてむつすむん地」の 2-gram に対し、文字列の「頻度」、文字列の「種類」、「こんて」（連綿活字の対応数）、「キリシタン版」（キリシタン版の連綿活字の対応数）、「共

通」(活字本と共通する数)、「こんて単独」(「こんてむつすむん地」独自の連綿活字の種類数、「連綿カバー率」(文字列の種類数に対する「こんてむつすむん地」の連綿活字の種類数の比率)についてまとめたものである(表 11-1 参照)。

頻度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
種類	1312	627	357	260	204	193	137	128	97	88
こんて	0	2	1	0	2	2	3	1	2	1
キリシタン版	20	14	8	12	5	6	3	5	2	4
共通	0	0	1	0	2	1	2	1	1	1
こんて単独	0	2	0	0	0	1	1	0	1	0
連綿カバー率	0	0.3	0.2	0	0.9	1.0	2.2	0.8	2.1	1.1

表 11-1 : 2-gram の頻度と連綿活字 (1)

頻度が低い文字列では、「こんてむつすむん地」の連綿活字は少ない。活字本でそれなりの数があるのは、活字本の連綿活字と「こんてむつすむん地」本文との間にずれがあることを示している。仮に、「こんてむつすむん地」でこれらの連綿活字を多く用いたなら、本文の出現頻度を無視して連綿活字を使用したことになり、キリシタン版への準拠度が高いことになるが、実際は異なるようである(表 11-2,3,4 参照)。

頻度	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
種類	86	69	56	65	49	46	40	35	32	39
こんて	4	1	3	1	2	3	2	0	0	2
キリシタン版	9	4	2	3	4	8	3	1	3	7
共通	4	0	2	1	2	2	2	0	0	2
こんて単独	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0
連綿カバー率	4.7	1.4	5.4	1.5	4.1	6.5	5.0	0	0	5.1

表 11-2 : 2-gram の頻度と連綿活字 (2)

頻度	21-	26-	31-	36-	41-	46-	51-	61-	71-	81-	91-
	25	30	35	40	45	50	60	70	80	90	100
種類	134	126	78	74	70	56	77	54	50	36	24
こんて	6	9	7	10	6	6	13	5	6	5	8
キリシタン版	12	8	7	12	7	9	14	5	8	5	7
共通	6	7	7	9	5	4	10	3	6	4	6
こんて単独	0	2	0	1	1	2	3	2	0	1	2
連綿カバー率	4.5	7.1	9.0	13.5	8.6	10.7	16.9	9.3	12.0	13.9	33.3

表 11-3 : 2-gram の頻度と連綿活字 (3)

頻度	101-120	121-150	151-200	201-
種類	45	38	35	42
こんて	14	12	17	22
キリシタン版	13	8	15	20
共通	13	7	15	19
こんて単独	1	5	2	3
連綿カバー率	31.1	31.6	48.6	52.4

表 11-4 : 2-gram の頻度と連綿活字 (4)

「こんてむつすむん地」の連綿活字の使用は活字本と必ずしも連動しない。低頻度文字列に連綿活字を持たず高頻度文字列に独自の連綿活字を持ち、テキストに依存する設計がなされている。

とくに高頻度な「をひ」は文字列「をひて」に用いられるが、キリシタン版では連綿活字「をひて」が担当する。同じく高頻度な「こゝ」「なを」「した」「しり」「なき」「よろ」「もの」は、「ぎやどぺかどる」では「茲・爰」「猶・尚」「下・従」「知」「悦・欣・喜」「者・物」など漢字が主に担当する形態素に対応しており、漢字活字の有無が原因である。

その他の連綿活字も「漢字+活用語尾」という動詞が仮名に開かれた場合に現れる文字列であることが多いが、これらは「ぎやどぺかどる」に比べて漢字数を大幅に減らした「どちりなきりしたん」では単独仮名活字が使われている。つまり「ぎやどぺかどる」で主として漢字だった語が仮名に開かれるとき、「どちりなきりしたん」では新たに連綿活字が用意されずに単独仮名活字で代用するが、「こんてむつすむん地」ではテキストに依存する文字列の出現頻度と、可読性向上の必要性（連綿活字は語の分節を示す機能をもつ）から改めて連綿活字を選出したと思われる。木活字であれば活字の作成は容易で、活字母型を設計する手間などもないため、テキストに即した柔軟な活字の運用が可能である。ここに、ある程度は新しい活字を追加するものの、基本的には同じ活字セットを共有するキリシタン版後期国字活字本との大きな相違が現れたということだろう（表 12 参照）。

	ぎやどぺかどる	どちりなきりしたん	こんてむつすむん地
ここ	茲・爰	こ+ゝ	こゝ
こころ	心	心(こゝろ)・こ+ゝ+ろ	こゝろ・こゝ+ろ
なを	猶・尚	な+を	なを
もの	者・物・も+の	物・者・も+の	物・者・もの
よろこび	悦び・欣び・喜び・ よ+ろ+こ+び	よ+ろ+こ+び	よろ+こ+び
なき	な+き	な+き	なき

表 12 : 漢字表記と仮名表記（括弧内はルビ、+は単独活字の組み合わせ）

白井（2008）で指摘したように、キリシタン版後期国字活字本は基本的に高頻度の文字列に対応する連綿活字を用意したが、「ん」で終わる連綿活字や、清濁関係にある連綿（活字清音の連綿活字を作ったなら、活字母型を使いまわして需要に関係なく濁音の連綿活字も用意する）については頻度を考慮していないなど特殊な例があった。「こんでむつすむん地」がこれらにならった形跡は全く無い。印刷前の段階での計画性と金属活字特有の量産という手段を持たない木活字本は、キリシタン版に似て異なるものであった。

8. まとめ

原田版「こんでむつすむん地」の版式は木活字本であるが、キリシタン版の活字セットをそのまま劣化させつつ用いたのではなく、テキストに即して必要となる活字を作成するという独自性を持つ。よって、「一文字（金属活字）を基にしてこれを被せ刻りし」とか、「行数や字数はもとより一字一字の書体までも長崎版のそれに合わせて組むようにした」という先行研究の指摘は、活字形状の類似性を過大評価したものであって正当ではない。

版式について整版とする説があったのは、冒頭部分とくに1丁と2丁では同じ活字を使うことが他と比べて少ないという事実によるのかもしれないが、「こんでむつすむん地」には連綿していないが活字としては合体している連続活字が含まれており、それが活字本らしくない印象を与えるためだと思われる。

本稿で明らかにしたように、使用活字の種類とその運用に大きな相違のある「こんでむつすむん地」をキリシタン版後期国字活字本に連なるものとみるのは無理がある。活字形状についてはキリシタン版の影響を大きく受けているが、原本調査に基づく大内田（2000:38）の報告ではキリシタン版とは異なるバレン刷りだとされていることから、版式のうえでは独立した古活字本として評価するのが正しいだろう。「こんでむつすむん地」が印刷物の出来としてキリシタン版に比肩するとは思われないが、単にキリシタン版を模した劣化版なのではなく、連綿活字の運用に可読性向上を意識した独自の工夫を持つことは、印刷技術史のうえで注目されてよい。

また、キリシタン版においては活字印刷技法が日本語表現に与える影響を無視できないことを踏まえるなら、日本語の表記関係資料として用いる際には、「こんでむつすむん地」がキリシタン版とは異質な資料であることを理解した取り扱いが必要である。

付記

本稿は、平成23年度～26年度科学研究費（基盤研究B）「多言語辞書と金属活字印刷から探るキリシタン文献の文字・語彙同定の過程」（課題番号：23320093 研究代表者：豊島正之）、および、平成24年度～27年度科学研究費（若手研究B）「「ひですの経」の言語的特徴によるイエズス会の言語規範の批判的再検討」（課題番号：24720205 研究代表者：白井純）、による研究成果の一部である。

参考文献

- 新井トシ (1964) 「きりしたん版の出版とその周辺 (三)」『ビブリア』29、天理大学図書館
新井トシ (1965) 「きりしたん版の出版とその周辺 (五)」『ビブリア』31、天理大学図書館
新井トシ (1973) 「巡察使ヴァリニャーノ師ときりしたん版の出版」、天理図書館編『きりしたん版の研究』天理大学出版部、所収
池内健次 (1976) 『『こんてむつすむん地』の「御」の字』『ビブリア』62、天理大学図書館
大内田貞郎 (2000) 「きりしたん版について」、印刷史研究会編『本と活字の歴史事典』柏書房、所収
富永牧太 (1956) 「こんてむつすむん地の版式について」『ビブリア』7、天理大学図書館
富永牧太 (1958) 「再びこんてむつすむん地の版式について」『天理大学学報』26、天理大学人文学会
白井純 (2008) 「キリシタン版の連綿活字について」『アジア・アフリカ言語文化研究』76
白井純 (2013) 「キリシタン語学全般」、豊島正之編『キリシタンと出版』八木書店、所収
豊島正之 (2001) 「ぎやどぺかどる解題」、尾原悟編『ぎやどぺかどる』教文館、所収
豊島正之 (2002) 「キリシタン文献の漢字整理について」『国語と国文学』79-11
豊島正之 (2009) 「キリシタン版の文字と版式」、張秀民ほか共著『活字印刷の文化史 きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで』勉誠出版、所収
豊島正之 (2010) 「前期キリシタン版の漢字活字に就て」『国語と国文学』87-3
山口忠男 (1991) 「初期キリシタン版の国字大字本について—「ばうちずもの授けやう」の印刷面を中心として—」『ビブリア』98

[しらい じゅん、信州大学准教授]